

スクールソーシャルワーク教職員研修プログラム開発の成果と課題

——大学と教育委員会との連携を通して——

山本 理絵・早川 真理・中村 豪志・水野みち代・酒井多輝子

1. 研究の目的

2008年より文部科学省の「スクールソーシャルワーカー活用事業」が始まり、2014年1月から「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が施行され、スクールソーシャルワーカーの配置は全国では、2014年度1,466人、2015年度2,247人、2016年度3,047人、2017年度5,047人と増えていつている。名古屋市は2014年度から、子ども応援委員会のメンバーとしてSSWrを配置していつた。

愛知県におけるスクールソーシャルワーカー(SSWr)の配置は、2013年度時点では20人であり、まだ一部の教育委員会に限られている状況があった。それは、白旗ら(2015)、中村他(2014)、佐藤ら(2010)の調査にもみられるように、SSWrの具体的な業務内容や活用方法に関する学校教員の理解の低さにもよると考えられた。SSWr養成研修とは別に教員を主な対象とした研修が実施されている地域もあるが、本格的に実施されている県はまだ少なく、その実施方法が議論されることは少ない。しかし、学校における複雑な諸問題の対応にあたって、SSWrと協力・連携を進めていくためには、学校の教職員が「社会福祉」の考え方を理解し、ソーシャルワークの視点や方法を取り入れていくこと、そして、教員やSSWr養成に関わる大学においても教育学と社会福祉学を専攻する教員が協働しスクールソーシャルワーク(SSW)を理解することが求められている。

愛知県立大学教育福祉学部・大学院人間発達学
研究科では2014年度から毎年、県内の幼稚園～

高校の教師を対象に、ソーシャルワークの視点と方法を修得することを目的として、スクールソーシャルワーク教職員研修プログラムを検討しつつ研修を企画・実施している。4年目の研修を終え、この内容・方法について振り返り、プログラム開発及び研修の成果と課題を明らかにし、効果的な研修の内容・方法・運営体制を検討することを本研究の目的とする。

2. 研究方法

愛知県立大学で実施されたスクールソーシャルワーク教職員研修の体制及び教材に関する資料、受講者へのアンケート(各回の感想・コメント等と4年目の研修前後2回のSSWrの職務理解に関する質問紙調査)結果を分析し、プログラム開発・研修の成果と課題から研修の内容・方法を検討する。

3. 倫理的配慮

受講者へのアンケート(無記名)については、調査目的やプライバシーの保護について説明の上実施し、調査結果は関係者にフィードバックした。研修内容として取り扱う事例についても、個人情報保護の観点から配慮している。本発表については、関係者の承諾を得ている。

4. プログラム開発及び研修の方法と内容

(1) 研修（プログラム開発事業）実施の経緯

本学部・研究科は、2010年度以降、愛知県総合教育センターと特別支援教育に関する共同研究を行ってきた。また、近隣の教育委員会とは、包括連携協定や、科学研究費での研究についての連携協定を締結し、調査に協力していただいていた。これらのつながりを活かして、1、2年目は独立行政法人教員研修センター受託研究として実施し、近隣の教育長に研修の運営委員会に参加してもらい、意見や要望を反映させた。3、4年目は科学研究費研究の一環として研修を実施しながらプログラム開発を行った。

(2) 研修プログラム開発の企画実施体制

定員20名の研修に関して、教育福祉学部教員6名の開発講師チームと、4名のTA（SSWrや学校管理職経験者によるティーチングアシスタント）、教育委員会関係者5名（2016年度から8名）による研修運営委員会が、企画・実施にあたった。1年目は講師チーム会議を11回開催し、研修内容を検討した。そして1、2年目は年6回、3年目は3回、4年目は回数増の要望を受けて4回の研修（講義と演習）を実施した。

(3) プログラムの内容と作成教材等

プログラムの内容は、ソーシャルワークの視点と価値、SSWの基本についての講義の後、いじめ・虐待、不登校・発達障害、貧困問題、外国籍の子どもと家庭、保護者対応・信頼関係づくりに関する各事例について、模擬ケース会議及び社会福祉学と教育学それぞれからの講義を行った。

研修のために準備する教材は、講義部分のパワーポイントスライド、参考論文・資料、テーマに関する事例・アセスメントシートなどである。毎回研修実施後、受講者アンケートに基づき、担当者は教材を見直し、最終的な教材冊子を年度末に編集・発行・配付した。2017年度末には、講義のスライドに解説を付けた教材集を発行し、各

地・各学校で自習できるようなものとし、普及・活用を図った。

(4) 教材開発・研修実施・評価にあたっての工夫

- ①連携・後援教育委員会の本事業に対する要望を考慮するため、研修開始に先立って、大学側が教材案を具体的に示し、連携自治体の教育長と意見交流の場を設けた（1年目は4回、その後は年2回）。
- ②学校現場と子どもを取り巻く深刻な問題状況と取り組みの実態について、講師チームで認識を共有するため、受講者に、申込時に「私の教育実践と本研修への期待」のレポートを提出してもらった。1、2年目は開講時に、この内容についてプレゼンテーションをしてもらい、講師チームは、これらの内容を活かして、演習事例を作成した。
- ③社会福祉学と教育学の教員がペアで講師となり、TAと一緒に研修内容を検討し、毎回の研修目標を決め、扱う事例を作成した。また、SSWの研究者等をゲスト講師に迎えた。
- ④本研修では、毎回最後の15分、アンケートの時間を設けた。研修受講者を受け手ではなく共同開発者と位置づけ、演習参加、感想・コメントをもとに研修時の教材や講義演習等の修正を行い、教材を中心とした報告書をまとめることを伝えた。
- ⑤半年の研修プログラムの獲得目標（修了プレゼン・修了レポート）を事前に受講者に提示した。修了レポートは、学んだことのまとめや、1つの事例を設定してアセスメントシートを使って背景を分析し支援方法などを考察するというものである。

(5) 研修前後のアンケート調査結果

4年目の研修後のアンケート結果では、今後の自身の実践に関して、エコマップを書くこと、情報収集・アセスメントシートを作成すること、学校内でケース会議を開くこと、ケース会議で支援方法や役割分担を考えること、保護者に寄り添い

ながら面談することなどは、ほとんどの受講者が自信をもって・まあまあできそうであると回答している。「他機関と一緒にケース会議をしたり連携して支援する」ことが自信をもってできそうだという人の割合は他の項目に比較してやや少なかったが、「SSWrと協働して動く」ことができそう（自信をもってできそう+まあまあできそう）という回答も87%あった。またSSWrが入ることによって進むことが期待される支援・役割・機能については、期待するという回答が事前調査より増えている項目が多く、「あまり期待しない」「全く期待しない」と回答した項目はゼロになっていた（資料参照）。

5. 考察と結論—成果と課題

- ①受講した教職員はソーシャルワークの視点と方法がある程度修得し、SSWrに対する理解も深まったといえる。また、ケース会議の効果も、模擬体験してもらうことによって実感してもらえた（アンケート結果や修了レポートより）。グループワークや修了レポート作成によって、より実践的な力量が獲得されたと考えられる。
- ②教育委員会とのつながりに基づいて、運営委員会を組織して意見交換したこと、運営委員会や研修会にSSWrも参加していたことにより、教育長・教育委員会の理解も深まり、受講者が各学校で活躍しやすい土壌がつけられた。研修開始後3、4年目には、愛知県におけるSSWrの配置も進んでいき、2016年度は県立高校6人と、県の市町村への補助事業開始により本学近隣6市町の小中学校に10人を含む36人のSSWrが配置された。2017年度は、19市町の小学校166校・中学校77校、本学近隣6市町の小中学校に15人が配置された。研修もSSWrとの連携を念頭においた内容にシフトしていった。また、近隣の教育委員会の中には、教育委員会独自にSSWr研修を実施するようになった市もあり、発展的な取り組みにつながった。
- ③愛知県総合教育センターの関係職員も運営委員

会に参加してもらったことにより、センターの教員対象の年間研修プログラムの中に、開発したソーシャルワーク教員研修プログラムを一部組み込んだ講座が企画・実施されるようになった。

- ④開発した教材をまとめて冊子とDVDを作成し、県内の全市町村教育委員会に配付したことによって、愛知県及び各市町村教育委員会のSSWrに関する関心が高まっている。この教材を活用して各地で教職員研修が試みられるようになっていく。
- ⑤大学教員の理解も深まり、研修後フォローとして、研修受講済の教職員等を対象とした実践検討会を大学で行っている。2018年度は、県立高校に7人、22市町（本学近隣6市町の小中学校に17人）にSSWrが配置されており、今後とも増加していくことをふまえて、このような研修を発展させていくことと、開発したプログラムをさらに改良しながら、今後の研修実施方法を検討していくことが課題である。

参考文献

- 佐藤広崇・金子智栄子「学校現場に求められる援助について—スクールソーシャルワーカーに期待される役割と課題」『文京学院大学人間学部研究紀要』Vol. 12 2010年
- 中村恵子他「小・中学生の問題行動等におけるスクールソーシャルワーカーによる支援の効果」『新潟青陵学会誌』第6巻3号 2014年
- 白旗希実子・丸山和昭「教員のスクールソーシャルワーカーに対するニーズ調査」『東北公益文科大学総合研究論集』第27号 2015年
- 坪井由実「『愛知県立大学スクールソーシャルワーク教員研修』モデルカリキュラム開発の取り組み」『生涯発達研究7』2015年
- 付記 本稿は、日本学校ソーシャルワーク学会第13回大会（2018年7月8日 愛知県立大学）における口頭発表（発表要旨査読有）の内容をもとにしている。

資料

スクールソーシャルワーカーの職務理解に関するアンケート調査(研修前後)結果

2017年8月・12月

<回答者 事前25人、事後23人>

1. SSWr と連携、協働した経験はありますか？(事後)

1) 研修以前から経験していた(11) 2) 本研修が始まってから初めて経験した(4) 3) まだ経験していない(8)

↓ ↓
どのような事例に関してですか？(複数回答可)1) 不登校(9) 2) 児童虐待(4) 3) いじめ(1) 4) 子どもの貧困(3) 5) 非行(1) 6) 特別支援(5)
7) 保護者対応(8) 8) 学級崩壊(0) 9) 無気力・怠学(0) 10) 性の問題(1) 11) その他() (1)

2. SSW 教職員研修に参加して、以下のことをどの程度実践できそうですか？(事後)

(1 自信をもってできそう 2 まあまあできそう 3 あまり自信がない 4 自信がない)

(1 2 3 4)

1 取り組む事例についてエコマップを書く	(4)	(16)	(3)	(0)
2 情報収集・アセスメントシートを作成する	(5)	(16)	(2)	(0)
3 学校内でケース会議を開く	(5)	(16)	(2)	(0)
4 SSWr と協働して動く	(6)	(14)	(3)	(0)
5 ケース会議で支援方法や役割分担を考える	(5)	(17)	(1)	(0)
6 他機関と一緒にケース会議をしたり連携して支援する	(2)	(13)	(8)	(0)
7 保護者に寄り添いながら面談する	(7)	(15)	(1)	(0)

3. SSWr が入ることによって進むことが期待される支援・役割・機能について (上段: 事前 下段: 事後)

(1 大いに期待する 2 多少期待する 3 どちらとも言えない 4 あまり期待しない 5 全く期待しない)

① 児童生徒に対する支援

(1 2 3 4 5)

1 不登校状態にある(その傾向にある)児童生徒への支援 (4)	(16)	(4)	(1)	(0)	(4)
2 虐待されている(虐待が疑われる)児童生徒への支援 (6)	(20)	(1)	(0)	(0)	(4)
3 発達上の課題を抱えている児童生徒への支援 (2)	(21)	(2)	(0)	(0)	(0)
4 非行問題をおこす児童生徒への支援 (1)	(9)	(10)	(3)	(2)	(1)
5 怠学・無気力状態にある(その傾向にある)児童生徒への支援 (1)	(11)	(7)	(5)	(0)	(0)
6 性に関する問題を抱えた児童生徒への支援 (1)	(14)	(5)	(3)	(0)	(3)
7 児童生徒に対して社会福祉制度に関する学習をする機会の提供 (0)	(15)	(7)	(1)	(0)	(0)
	(15)	(3)	(3)	(2)	(2)
	(13)	(7)	(3)	(0)	(0)
	(11)	(8)	(3)	(1)	(2)
	(14)	(5)	(4)	(0)	(0)
	(11)	(6)	(5)	(2)	(1)
	(11)	(6)	(6)	(0)	(0)

② 関係機関とのネットワークの構築、連携・調整

8 不登校支援に関する関係機関(適応指導教室、フリースクール等)とのネットワークの構築、連携・調整 (4)	(16)	(3)	(2)	(0)	(4)
9 特別支援教育に関する関係機関(教育センター、特別支援学校等)とのネットワークの構築、連携・調整 (2)	(16)	(6)	(1)	(0)	(0)
	(13)	(4)	(5)	(1)	(2)
	(11)	(8)	(4)	(0)	(0)

10 非行問題支援に関する関係機関(少年サポートセンター、警察署(生活安全課等) (3) とのネットワークの構築、連携・調整	(15) (6) (1) (0) (3) (14) (9) (0) (0) (0)
11 福祉関係機関(児童相談所、福祉事務所、市町村福祉課等)とのネットワークの (7) 構築、連携・調整	(18) (2) (2) (0) (3) (19) (4) (0) (0) (0)
12 医療関係機関(小児科、精神科、保健所、精神保健福祉センター等)とのネット (1) ワークの構築、連携・調整	(16) (2) (4) (2) (1) (15) (5) (3) (0) (0)
13 地域の社会福祉に関する支援をおこなう団体(NPO 法人、ボランティアグループ (0) 等)とのネットワークの構築、連携・調整	(16) (4) (2) (1) (2) (14) (6) (3) (0) (0)
③ 学校におけるチーム体制の構築、支援	
14 福祉的な問題に取り組む学校内チーム体制の構築 (3)	(10) (10) (2) (1) (2) (11) (9) (3) (0) (0)
15 学校内の教員へのコンサルテーション活動(相談支援) (1)	(10) (11) (0) (2) (2) (11) (10) (2) (0) (0)
16 小学校、中学校、高等学校それぞれの児童生徒に関する情報の共有 (0)	(9) (10) (2) (2) (2) (10) (12) (1) (0) (0)
17 幼保、小中の児童生徒に関する情報の共有 (0)	(7) (13) (1) (1) (3) (9) (13) (1) (0) (0)
④ 保護者に対する支援	
18 児童生徒が不登校状態にある保護者への支援 (8)	(17) (2) (1) (0) (4) (17) (4) (2) (0) (0)
19 虐待、家庭内暴力問題を抱えている保護者への支援 (5)	(16) (4) (0) (1) (3) (19) (4) (0) (0) (0)
20 発達上の課題を抱えている児童生徒の保護者への支援 (3)	(9) (10) (2) (2) (1) (15) (5) (3) (0) (0)
21 精神面、情緒面において課題を抱えている保護者への支援 (3)	(13) (6) (1) (2) (2) (17) (3) (3) (0) (0)
22 家庭の経済状況において課題を抱えている保護者への支援 (5)	(15) (4) (1) (1) (3) (19) (3) (1) (0) (0)
23 保護者に対して社会福祉制度に関する学習をする機会の提供 (1)	(15) (3) (3) (1) (2) (17) (6) (0) (0) (0)
24 学校に対して不信感を抱く保護者への仲介、関係性支援 (5)	(16) (4) (1) (1) (2) (14) (5) (4) (0) (0)
⑤ 教職員等への研修活動 等	
25 SSW の役割・機能に関する研修 (2)	(13) (7) (0) (2) (2) (16) (6) (1) (0) (0)
26 人権、子どもの権利擁護に関する教育研修 (0)	(8) (10) (2) (2) (2) (5) (13) (5) (0) (0)
27 児童虐待に関する研修 (0)	(8) (12) (0) (0) (4) (13) (8) (2) (0) (0)
28 保護者対応に関する研修 (0)	(13) (5) (2) (1) (3) (10) (10) (3) (0) (0)
29 社会福祉制度に関する研修 (0)	(12) (5) (3) (2) (2) (13) (8) (2) (0) (0)

⑥上記1～29のうち、もっとも期待すること（3位まで）

1～3位の合計(人数)を上欄番号前へ記載（事後）

4. 本研修の分量(約19時間)は適切でしたか? (○はひとつ)

1 適切だった (20) 2 もっとたくさんやってほしい (2) 3 もっと少なくともよい (1)

5. 本研修の時期・日程は適切でしたか?

1 適切だった (16) 2 改善したほうがよい部分がある (7)

6. 本研修のプログラムについての感想や課題がありましたら、お書きください。 (15)

- ・現在、教師・学校が指導しなければならぬことが多くある。学習指導・生徒指導・安全指導など、教えあげたらきりが無い状況である。その上に家庭や地域についても、と言われ、正直、手に負えないのが本音である。しかし、本研修を受け、学校があるべき姿や自分の職の専門性がクリアになった。チーム学校を目指し、地域にSSWを根ざしていきたい。
- ・SSWの役割などが理解でき、校内でも活躍してもらっています。
- ・忙しい毎日の中、様々な児童が増え担任が抱えるものが大きくなってきたと思います。その中で広い視野と専門知識をもったSSWの方に入っていただけるのは、とても効果のあることだと思います。今回SSWについて学ばせていただき学校こうまく取り入れて手厚く支援できたらと思います。
- ・内容が充実している反面、時間に制限され、グループ活動から出た質問や課題を取り上げ深めていくことができないことが残念でした。内容を精査してグループ活動から出た現場で起こる課題への取り組み・進め方について、ご助言いただければ良かったです。
- ・1コマの研修で学ぶSSWの切り口(例えば第4回であれば生活保護)とその後のケース会議でとりあつかうケースを一致させると、その日にインプットしたことを使って模擬実践できるのでより身につけることができるのではないのでしょうか。
- ・具体的に分かりやすくグループ活動によって他校の様子も分かった。ソーシャルワークの視点に立った指導が身に付いた。
- ・講義内容は大変充実していてわかりやすく学べました。また質問にも丁寧に答えていただきありがたかったです。グループワークも充実して行うことができ、他の先生方の事例、物の見方からたくさん学ばせていただきました。
- ・レポート作成についてのグループ発表は今後のレポートを書いていく上で、とても参考になりました。
- ・ケース会議の進め方などは、とても参考になり、よかったです。現場で働いている身としては本当に多忙なのでレポート作成は、つらいというのが本音です。今後受講される方のことを考えると、なくすことも検討していただきたいです。
- ・模擬ケース会議を経験でき、実際こどように行えばよいの理解し、事前こどのような調整を行えばよいのかを考えることができた。
- ・目の前の事象を客観的に見立てる視野が広がった感じがしています。今後の指導に活かしていきたいです。
- ・他市の高い問題意識をもってみる先生方と毎回ディスカッションする場があり非常に実習的に学ぶことができた。各ご指導の先生方から毎回、今、最も必要な資料提供がなされ研修に通わせていただくのが、ものすごく楽しかった。
- ・この研修の目的がSSWの必要性を教育現場に広めていくということで、早速、情宣していきたいと思います。

7. 今後、SSWrと連携していくにあたって、不安なことや要望がありましたら、お書きください。 (11)

- ・SSWの不足から起こるSSWの多忙化、SSWと学校との連携が上手くいかないという現状がある。保護者の時間に合わせるより、SSWの時間に合わせ日程調整している限界がある。
- ・SSWは気さくな方ばかりで、とても感謝している。とてもお忙しい為、SSWの増員が必要。
- ・時間の調節やSSWの認知度を保護者にも高めていくこと。
- ・日々の流れの中でタイミングが大切なことがあるが、SSWが各学校を巡回しているので、うまくタイミングがあわないことが多い。
- ・SSWの需要は多く、今後配置される自治体が増えていくと考えられます。配置にあたっては学校現場へ連携の取り方、ケース会議の持ち方などの周知をすることで、より有効になるのだと考えます。
- ・学校現場で行われている教育相談とのつながりやケース会議の持ち方のノウハウを広めることを考えて頂けると有難い。
- ・自分が働く市にもSSWが配置されることを切に望んでいます。
- ・いずれかは各校に1人配置されるといいと思います。
- ・学校には、いろいろな課題をかかえているケースがあるので連絡をとりあてていきたい。
- ・不安なことが、学校の中にもこまれていく対応事案は年々過密になっていっている。子どもを取りまく環境も、より多岐な重い課題をかかえている事案もある。それぞれの立場の方が過重な勤務になりすぎないように対応を整理し対応の総時間を意識した軸が必要。